


Case 2

地域連携で脚本のない探究ができる 「場所」や「チャンス」を提供 生徒が自分力を磨き、未来を切り拓く

 佐伯豊南高校
(大分・県立)



教頭
後藤 香代子先生



総合学科副主任
羽田野 明美先生



総合学科主任
堂脇 真理子先生

佐伯豊南高校は、佐伯鶴岡高校と旧・佐伯豊南高校が統合して2014年に開校した学校だ。総合学科、食農ビジネス科、工業技術科、福祉科の4つの学科がある。

同校の総合学科は、生徒がさまざまな機会を生かしながら地元の活性化に取り組む探究活動を行っている(図1参照)。その名も「SHAプロジェクト(SAIKI HOUNAN ALL)」だ。個々の活動には学科を超えて生徒が応援に加わることもあるという。

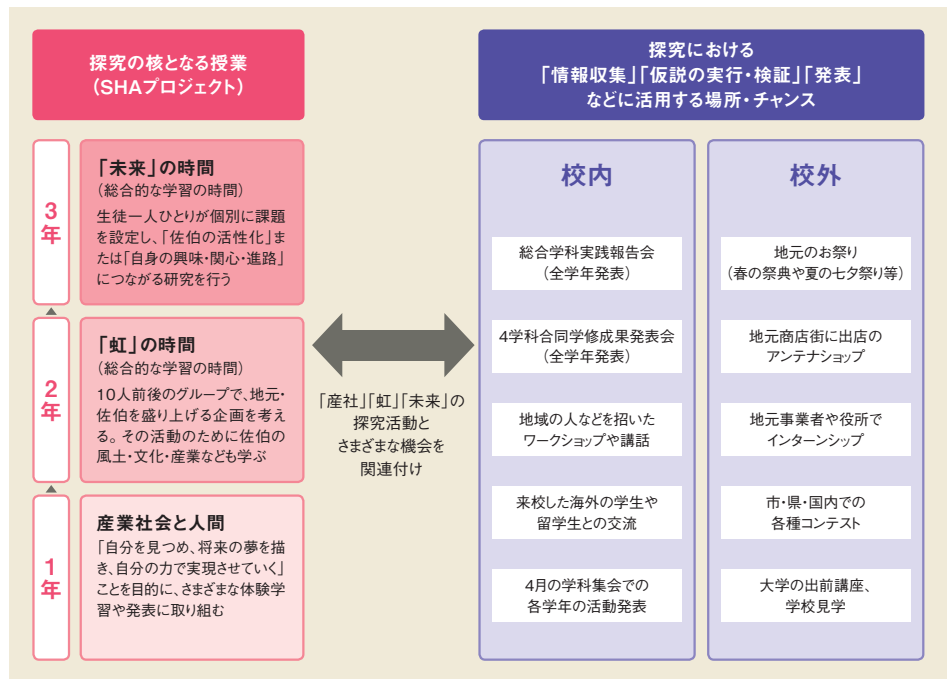
探究活動に力を入れた理由を、総合学科主任の堂脇 真理子先生は「4つの学科になったからこそ、総合学科の魅力が築きたかった」からだと語る。総合学科らしい魅力とは何か。

「総合学科には将来何をしたいかまだわからないまま、または漠然とした夢をもって、入学してくる生徒がたくさんいます。そうした生徒たちに、さまざまな揺さぶりをかける学びを用意したかったのです。この学科で学ぶなかで生徒の興味・関心が呼び起こされ、自分で次の道を切り拓いていく『自分力』も磨いていけるように。揺さぶる仕掛けとしてこの地域で何ができるか模索したところ、周囲から期待以上のご協力を頂けることになり、今の形になっていきました(堂脇先生)」

教頭の後藤 香代子先生は、学校全

自分で道を切り拓けるように
生徒に揺さぶりをかけたい

図1 佐伯豊南高校の探究活動の概要



体としての狙いもあったと言及する。「4つの学科が4つの学校にならないように、総合学科における地域密着の探究活動を、各科の取り組みを結びつける核にしていけたら、と考えています。本校が目指す「地域とともに」学習する場を実現し、そのなかで生徒には、課題解決力やコミュニケーション能力

地域や学校にある資源を
研究テーマに合わせて各自活用

など、変化の激しい社会に対応する力を育ててほしいと思っています」

SHAプロジェクトはまず、入学早々生徒に「見る力、聞く力、調べる力、まとめる力、発表する力を身に付けよ

課題研究をする「虹」の時間や「未来」の時間は、生徒は10人前後のグループに分かれて、基本的に校内で活動する。ただし、その活動にさまざまな課外活動も関連付けられており、実際には生徒たちは地域を舞台にして探究活動を行う。

図2 3年生「未来」の時間の個別研究テーマ例

分野	生徒それぞれのテーマ
観光	佐伯の恐い観光名所 ～お化けを見たい～
	佐伯ラーメンを全国へ ～ホームページで佐伯を紹介
	佐伯フォトポスター ～フォトポスターでPR活動～
イベント	東北と九州をつなぐ絆 ～県を越えたスイーツ
	図書館利用率を上げよう ～目指せハッピーセブン全員達成～
商品開発	ゲーム制作 ゲームで佐伯を広めよう
	カボスぶりの研究 ～佐伯の特産品を使った商品開発～
食	ご当地ソング ～佐伯のご当地ソングを作ろう！～
	佐伯のお魚世界を旅する ～佐伯の魚を知り尽くせ！～
保育	スポーツと食事 ～スポーツと食事の関係性
	おやっ!! ～栄養いっぱい! 苦手なものの克服～
医療	子どもの笑顔で佐伯を元気に! ダンスでつくる笑顔の輪
	食べやすい病院食づくり～医療に役立つために～
防災	佐伯で作るリハビリ ～佐伯から広げるリハビリの輪
	私たちの身近な危険 ～命を守るために～
	楽しくできる防災訓練をしよう

う」と投げかけて始まる。以降も折にふれて示される合言葉だ。

次いで1年生は、「産業社会と人間」で、右の写真の産社新聞にあるような体験学習を行う。その狙いを、総合学科副主任の羽田野明美先生は「興味・関心がどこに転がっているかわからない生徒のスイッチが押されることを期待している」と語る。

2年生は「虹」の時間と名付けた総合的な学習の時間(以下総学)に、グループによる課題研究に挑む。観光、商品開発、防災などの大テーマから興味ある分野を選び、1グループ10人前後に分かれて「佐伯市を盛り上げる企画」を練るのだ。5月までに研究テーマ

を決めるが、単なる調べ学習になっていないか、担任・副担任の先生と面談で確認する。6月には別府大学で探究の進め方の講義も受け、活動のイロハを押さえたうえで研究を進めていく。

続く3年生は、「未来」の時間とした総学で、個別の課題研究に取り組む。研究テーマ例は図2のとおりだ。授業には担任と副担任のほか、各教科から選任された担当も加わり、1教員が10人前後の生徒の探究活動を見守る。

この探究活動で特徴的なことは、生徒が地域や学校にある資源を、研究テーマに合わせて個別に柔軟に、自分の活動に生かしていることだ。

例えばスイーツの商品開発を研究する生徒は、授業に菓子職人を講師として招いて試作品への意見をもらい、地元のお祭りや商品を販売してお客さん

の反応も見る。観光プランを考える生徒は、2年次のインターンシップで市役所の企画の立て方を学び、留学生の来校時に自分たちの企画をプレゼンして感想をもらう。地元の食材を調べる生徒は、食農ビジネス科の生徒と一緒に芋の苗を植え、地域の人と協働で育てる。いわば、地域や学校で起こるすべての物事が、生徒の探究における情報収集や、考えたことの実行・検証・改善の場になっているのだ。

そうした活動で探究の質を深めたうえで、3学期には総合学科全体で発表会を実施。さらに4学科合同で、生徒同士が各科目で取り組んだことを発表して学び合う催しも行っている。

先生が教えられなくてもいいむしろ「教えてはいけない」

佐伯豊南高校ではまさに十人十色なやり方で探究活動が進むわけだが、生徒たち全員が最初から具体的な行動をイメージできていたわけではない。カギを握るのはそばにいる先生だ。探究活動に付き添ってきた堂脇先生や羽田野先生は、「生徒が想いを口に出したときに、教員が耳を傾けて動く」ことを大事にしてきたという。

「例えば生徒から『こんな研究をしたい』『ここがわからない』といった相談を受けたら、答えを示そうとするのではなく、そこに向かうためのとっかかりを一緒に探すんです。市役所の窓口や地域おこし協力隊に相談できないかな、地元のラーメン屋さんを訪ねてみようか、といったように(羽田野先生)

「生徒が取り組んだことをお披露目できる機会も作ります。お祭りや留学生との交流の場、コンテスト。探究の進め方を伝えたら、我々があとやることは『場所』や『チャンス』を提供し、生徒が活動できるようにすることだと思っております(堂脇先生)

管理職である後藤先生も、探究活



1年次の「産業社会と人間」の授業の活動を生徒自身がまとめた産社新聞。



写真右上は商店街やお祭りに出すアンテナショップ。右下は個別研究、地元産のカボスから精油を抽出。左上はワークショップのようす、左下は4学科合同同学修成果発表会。

interview

「若いからまだいいや」ではなく
高校で地域のことを考えたから、
やりたいこと、できることが広がった



佐伯豊南高校OB(現・市役所勤務)
後藤 臣飛さん

高

2の時に取り組んだ研究テーマは、地元の伝統文化の踊りを広めることでした。その研究の一環で、市役所でインターンシップをしたとき、職員の方から「高校生主催のイベントをやってみないか」と誘われたんです。やりますと答えて、予算書作成から企画・運営まで担うなかで、イベントで地域を盛り上げる面白さと、人を巻き込む責任の重さを実感して。もっとやってみたくなり、高3の時の課題研究では、地元商店街をイベントで盛り上げることに挑戦しました。

そうした経験が基になり、進路には佐伯市役所を選び、今春からまちづくり推進課で働いています。国家公務員一般職にも合格したのですが、この地域でできることを探りたくなったのです。正直、高校入学前は「将来は給料が良くて安定したところに」と思っていたのですが。「若いからまだいいや」ではなく、高校で地域のことを真剣に考えたから、やりたいこと、できることが広がったのだと思います。高校3年間で得たものを絶対に無駄にしたいです。

動における先生たちのそうした姿勢をバックアップしていきたいという。

「先生方のなかには、自分の守備範囲を越える探究をする生徒がいると『いいんだらうか?』と不安になる方がいるかもしれないので、『いいんだよ』と伝えていきたいです。先生の専門性だけでは教えられないことがあつていい。むしろ教えて終わったら探究にならないので『教えてはいけない』。その生徒は何を知りたいのか、どうすればそこに迫れるのか、自身で掘っていきけるように寄り添うのが先生の役割だと思っております」

大人が脚本を描くのではなく
生徒が失敗しながら探究する

教えられないことがあつていい、というスタンスを、堂脇先生は外部の協力を

者とも共有しようと努めている。

堂脇先生は、プロジェクト1年目のときに学校から佐伯市役所に約200日通い、関係を築いてきた。また、ツテを頼りに地元の企業や識者、東京の企業にも探究活動への協力を仰いできた。つまり外部との連携にも尽力してきたわけだが、その協力相手から「自分は何をすればいいのか」と問われると、「そこから生徒と一緒に考えてもらえませんか」とお願いしているというのだ。

「その対応を批判されることもありませんが、私たち大人が事前にストーリーを描いたら、探究ではなくなってしまう。何が起きるか誰もわからないなかで活動してこそ、すごいドラマが生まれるんですよ。これまでの経験では、探究が進むにつれて協力してくださった

方も『良かった』と言ってくれます」(堂脇先生)

例えばある生徒は、地元産の赤じそを使ったジュレの商品開発に挑むも、何度やっても固まらず、お祭りへの出品に黄信号が灯って号泣した。しかし協力者のシエフも固唾を呑んで見守るなか、ついには試作品を完成させ、喜び、自信も深めた。

「独創的な探究をする時、時には失敗もします。でもその失敗を次に役立てていけばいいんだ、ということをやむを得ず学んでほしいです」(後藤先生)

周囲の大人が応援するなかで
児童・生徒が未来を創造する

SHAプロジェクトについては、「最初はやらされ感があった」と本音を漏らす生徒もいるという。けれども、誰もゴールを知らないことに取り組むうちに次第に研究テーマが自分のものになっていき、最終的には多くの生徒が「やって良かった」という感想を残すそうだ。

活動を通して、自分で道を切り拓く力が高まったとも感じている。ある生徒は、スイーツの商品開発・販売に携わるなかで流通の仕組みの大切さを知り、フード・マネジメントを学べる大学を自分の進路に見定めた。一方、探究するほど世界が広がる楽しさを知り、進学先で留学や学生プロジェクトに旺盛にチャレンジしている卒業生もいる。

とはいえ、なかには主体性に火がついた活動までは至らない生徒もいる。だ

からこそ堂脇先生は「生徒の声を聞き漏らさないようにすることが重要だと考えている。」

「以前に講演された方が生徒にこんな話をしてくれたんです。夢を口にしながら『努力』は始まり、『責任』も生まれる。すると『協力してくれる人』も現れる、と。そうした経験をすべての生徒が味わえるような学校にしていければと思います」

後藤先生は、そんな仕組みが受け継がれていく体制も目指したいという。

「佐伯市では、学校の実践を核とした『ふるさと創生』に取り組もうと、市内の小中高の連携や、教育活動における行政や地域との連携を進めてきました。そのつながりをより堅牢なものにし、児童・生徒のやりたいことを周囲が応援する体制を整えていって、子どもたちがその将来や、佐伯市の未来を、自ら切り拓いていけるようにできればと思います」

探究設計へのヒント

- 1 生徒が自分で課題を見出せるように地域のことを多方面から学習・探究する活動で揺さぶりをかける
- 2 探究の質を高めていけるように研究内容を発信して反応をもらって改善する機会を多数創出
- 3 主体的な探究活動ができるように生徒の想いに耳を傾け応援する立場に教員や地域の大人が回る